



*キャンディ・ファクトリー・プロジェクト

/ 北九州国際ビエンナーレin愛知

A *Candy Factory Project / Kitakyushu Biennial in Aichi

1998年神奈川県にて結成／福岡県拠点

古郷卓司が主宰する国際的な展覧会のプラットフォーム。宮川敬一（日本）、ジョン・ミラー（ニューヨーク/ベルリン）、フェデリコ・パロネッロ（イタリア）、マイク・ボード（スウェーデン）、ヨンヘ・チャン・ヘヴィー・インダストリーズ（ソウル）、チャールズ・リム（シンガポール）、シヨン・スナイダー（ベルリン）らと、長期にわたって作品を継続的に制作して発表してきた。2007年以降はNPO法人アート・インスティテュート北九州の下、北九州市で北九州国際ビエンナーレを開催し、国境やグローバル経済がもたらす人の移動をテーマに「移民」展を開催。2011年第三回も「移民」展の続編を開催。2012年以降、これら活動の成果を携えて、*Candy Factory Projects 北九州国際ビエンナーレ in シンガポール（プライベート・ミュージアム）、*Candy Factory Projects 北九州国際ビエンナーレ in ベルリン（ZK/U Center for Art and Urbanistics）を開催するなど、グループ展のみならず、さまざまな形、さまざまなメディアでユニークな活動を続けている。

『*キャンディ・ファクトリー・プロジェクト / 北九州国際ビエンナーレ・ワールド・ツアー 2012』展示風景 Gallery Soap 2012 photo: Jean-Christophe Lett Courtesy of the artist and Barbara Wien, Berlin.



アローラ & カルサディーラ

Allora & Calzadilla

1995年より共同制作開始／サンファン（ペルトリコ）拠点

軍事・政治的な衝突や緊張を、徹底的なリサーチと卓越した解釈、創造的跳躍によって、映像・彫刻・パフォーマンス化する作品—平和憲法に取材した《決められないゴール》（2007、CCA北九州委嘱作品）もこれにあたる—で知られる。近年は、宇宙・地球規模の変動と人類学的なテーマを重ね合わせる叙事的な映像作品や、鑑賞者の経験を重視する音楽パフォーマンスも多いが、初期より一貫するのは、周縁的、個別・具体的な立脚点から、普遍的なテーマや問題に迫る精緻な瞬発力である。第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2011）アメリカ合衆国館代表。ドクメンタ13（カッセル、ドイツ、2012）や光州ビエンナーレ（2004、2008、2014）など国際展への参加多数。ニューヨーク近代美術館（2010）、フィラデルフィア美術館（2014-15）などで個展。

《The Great Silence》2014 Courtesy of the artist



味岡 伸太郎

AJIOKA Shintaro

1949年愛知県生まれ／愛知県拠点

アーティスト、編集者、デザイナー、タイポグラファー。アーティストとしての契機になったのが1989年のことで、豊橋の自宅を改築する際に東三河の色彩豊かな土と出会ったことである。その後、愛知県の三河を中心に地質調査とよぶ土の収集を始め、その調査に基づいて、紙の平面から小屋に近いもの、そして茶碗に至るまでさまざまな形で作品を発表してきた。とりわけ、味岡は採取した土に木工用ボンドを混ぜ綿布に定着させて「絵画」として発表した。地層の状態も含めて、その土地で採取した土を提示するだけであるが、その「絵画」は無限とも言える色の豊かなヴァリエーションと質感を作り出している。

《栃木県益子町地質調査 北郷谷》2012 Courtesy of the artist



ジョヴァンニ・アンセルモ

Giovanni ANSELMO

1934年ボルゴフランコ・ディヴェレーア（イタリア）生まれ／トリノ（イタリア）拠点当初、独学で絵画を学ぶが、ほどなく伝統的・近代的な技法から離脱し、石や金属を用いて重力・磁力など不可視のエネルギーの直覚をめざす作品を制作。1960年代後期の重要な美術運動、アルテ・ポーヴェラ（貧しい芸術）を代表する作家として、イタリア内外で活躍する。70年代末からはウルトラマリン（群青色。原義は「海の向こう」）の深度・強度をテーマとする制作を展開し、物質・エネルギー・光・距離の想像的な結合・変換を問いつづける。60年代美術が培ったラジカルな詩学を堅持する希有の存在。第44回ヴェネツィア・ビエンナーレ（1990）金獅子賞。クンストハレ・バーゼル（1979）、パリ市立近代美術館（1985）、ヴァンタートゥール美術館（2013）などで個展多数。

《Verso Oltremare a nord in basso e a est sud est in alto》
（ウルトラマリンに向かって、下・北、上・東南東）1979
Foto © Archivio fotografico Tucci Russo



リビジウンガ・カルドゾ (別名: レアンドロ・ネレフ)
Libidiunga CARDOSO (a.k.a. Leandro NEREFUH)

1975年モジ・ダス・クルーゼス (ブラジル) 生まれ/サンパウロ (ブラジル) 拠点
 カルドゾは、社会科学と美術を学んだ後、学術と芸術表現との間にある曖昧な領域でその活動を続けている。インスタレーションや展覧会、ワークショップとパフォーマンス、そして公共彫刻プロジェクトや、しばしば特定の文脈において作られた共産主義プロパガンダの実験を通して、彼の作品は過去のストーリーの公式的な解釈と関わる。とりわけラテンアメリカに彼の高い関心が注がれている。第12回ハバナ・ビエンナーレ (2015)、クンステン・フェスティバル・デザール (ブリュッセル, 2015)、第30回サンパウロ・ビエンナーレ (2012) などといった国際展での発表多数。またネレフは、リオデジャネイロにあるエスコラ・キャパシテの協働メンバーであり、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイで活動する政党PPUBの創設者でもある。

《Agitprop Abyssal》ダンサーのいる展示風景 インスタレーション、パフォーマンス、レクチャーシリーズ Zacheta National Gallery, ワルシャワ 2013-2014
 photo: Leandro Nerefu



マリアナ・カスティーリョ・デバル
Mariana CASTILLO DEBALL

1975年メキシコシティ (メキシコ) 生まれ/ベルリン (ドイツ) 拠点
 カスティーリョ・デバルは、長期にわたるリサーチをもとに、西洋文化において美術作品が、どのような政治的な状況において現れてくるのかを明らかにしようとする。インスタレーション、彫刻、写真そしてドローイングといった手法をとりながら、彼女は現代美術に限らず多分野の専門機関とのコラボレーションを行う。考古学、自然科学、科学技術を横断しながら、歴史的なもの (オブジェ) が、場所ごとの知識の蓄積に応じて受け取られ、読み解かれるさまざまなあり方を研究している。これまでに、第8回ベルリン・ビエンナーレ (2014)、ドクメンタ13 (カッセル, ドイツ, 2012)、第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ (2011) などに参加。

《Who will measure the space, who will tell me the time? (Sérignan)》展示風景
 Musée régional d'art contemporain, Sérignan, フランス 2015
 photo: Jean-Christophe Lett Courtesy of the artist and Barbara Wien, Berlin.



ディアンドデパートメントプロジェクト
D&DEPARTMENT PROJECT

2000年東京都にて設立/国内10+ソウル (韓国) 計11拠点
 デザイナーのナガオカケンメイによって「ロングライフデザイン」をテーマとするストアスタイルの活動体 D&DEPARTMENT PROJECT (ディアンドデパートメントプロジェクト) を創設。現在は国内外に11店舗を展開し、将来的には47都道府県に1カ所ずつ作り、全国的な規模で「息の長いその土地らしいデザイン」の発掘、紹介をしていく。2009年には新しい観光をイメージした観光ガイドブック [d design travel] を創刊し、現在は年3号 (3カ所) 発行。特集県をテーマにした新作落語の創作などさまざまなプロジェクトを展開し、物販、飲食、出版、観光を通して、47の日本の「らしさ」を見つめ直す活動を行っている。

[d design travel] vol.1~15 2008- Courtesy of D&DEPARTMENT Inc.



ニコラス・ガラニン
Nicholas GALANIN

1979年アラスカ州シトカ (米国) 生まれ/アラスカ州シトカ (米国) 拠点
 「適応と抵抗、嘘と誇張、夢、日常生活の記憶と詩的な感覚、こうしたテーマが私の作品には存在し音、テキスト、そしてイメージから、形を作り出していく」
 彼の出自となる先住民族が生み出した美術技法とその表現を幼い時から学んでいたガラニンは、そこに新たに学んだ現代の造形と表現とを加えていく。彼の作品はその両者をバランスを取りながら複雑に取りこむ。そうして、見るものに美術として文化を表象すること、さらには表現することの意味を一人のアーティストとして問いかける。

《Tsu Hédeí Shugaxtutaan II》2006 Courtesy of the artist



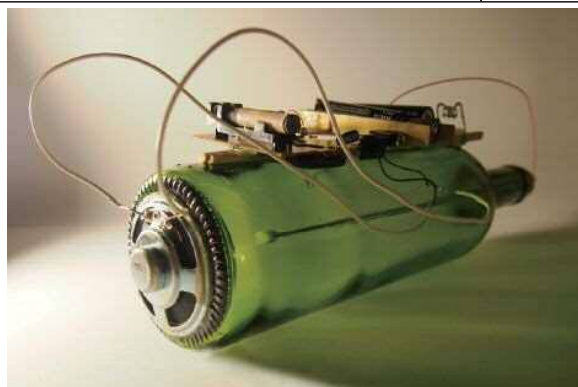
ジェリー・グレッツィンガー

Jerry GRETZINGER

1942年ミシガン州(米国) 生まれ/ミシガン州(米国) 拠点

1963年夏から仕事の合間の退屈な時間を使い、落書きとして想像上の都市のマップを描き始め、1983年まで描き加え続けた。その後マップは家の屋根裏部屋に保管されていたが、あるときから再開され、現在は3200以上の六つ切りサイズのパネルから一連の作品が成り立つ。アクリル、マーカー、色鉛筆、インク、コラージュ、厚紙にインクジェットプリントを使って色彩豊かに描かれる作品は、複雑なルールの設定とでたらめに構造を創り上げる過程の相互作用で生み出される。これまでアメリカを中心に展覧会を開催、2015年にはグループ展「LE BORD DES MONDES (パレ・ド・トーキョー、パリ)」にも参加し、スペースを大胆に使った展示で観客を魅了した。

《Jerry's Map》 2015 photo: 港千尋



キオ・グリフィス

Kio GRIFFITH

1963年神奈川県生まれ/ロサンゼルス(米国)、日本拠点

ヴィジュアル・サウンドアーティスト、キュレーター、エディター。アメリカと日本を主な拠点として、多彩な活動を展開する。グリフィスの作品は、時代とともに変遷する社会や言語等から素材を集め、それらを視覚的・聴覚的に再生し、観客に追体験させるという手法を取っている。そこには一貫して「失われたものに新しい命を吹き込む」という主題が秘められている。あいちトリエンナーレ2016では、環太平洋地域の様々な言語や地域の人々から「色」にまつわるメッセージを集め、それらの「声」による作曲を試みる。

《White Elephant / Fukushima Daiichi No.4 Reactor》 2013 photo: Kio Griffith



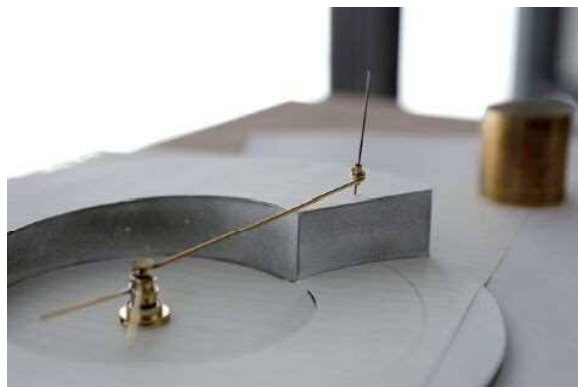
端 聡

HATA Satoshi

1960年北海道生まれ/北海道拠点

札幌を拠点に活動する美術家。1995年ドイツ学術交流会DAADの助成によりドイツに滞在して以降、国内外で多数の個展、グループ展に出品。大型の映像インスタレーションで知られ、物質と情報とを統合的に扱いながら、存在の意味を問い続けている。近年は水の記憶、物質とエネルギーの移動をテーマに作品を制作し、文明論的、宇宙論的想像力の展開を見せている。札幌国際芸術祭2014では企画段階から構想に加わり、地域ディレクターを務め、初めての国際芸術祭開催に寄与した。自らの制作だけでなく、後進の育成・指導にも尽力し、高い評価を得ている。

《液体は熱エネルギーにより気体となり、冷えて液体に戻る。そうあるべきだ。》 2015
Courtesy of the artist



久門 剛史

HISAKADO Tsuyoshi

1981年京都府生まれ/京都府拠点

日常に潜むささやかな事柄に着目し、その場所特有の歴史や現象を採集し、音や光、立体を用いてインスタレーションを組み立てる。個々の現象やオブジェクトはプログラミングにより制御され時間の流れに沿って構成されることが多く、観客は劇場や舞台空間に立たされたような身体的経験を得る。誰もがかつて経験したような感じを覚える断片を集積して創出されるどこにもない空間は、個人の記憶や経験と結び付き、日常とパラレルな異空間へと観客を導く。日産アートアワード2015ではオーディエンス賞を受賞。2002年よりアーティストグループSHINCHICAとしても活動している。

《らせんの練習》 2013
Courtesy of Aomori Contemporary Art Centre [ACAC], OTA FINE ARTS



石田 尚志

ISHIDA Takashi

1972年東京都生まれ／東京都拠点

筆の動きには明解な身体性があり、その一方で植物を思わせるような増殖感のある線を出発点に、運動体や時間の流れ、そして変化の様相を取り込んだ絵画と映像を、石田は作り出す。直に部屋の壁や床に描くこと、絵巻のような長尺の支持体を使用すること、描く自らの姿を撮影すること、アニメーションによるコマ撮り手法で編集するなど、その内容に合わせて、表現媒体を変えて、多面的に表現される。内容も、室内空間や窓、光や水の動きをテーマにしたもののほか、楽曲に合わせてドローイングのイメージが展開されていく《フーガの技法》などもあり、独自の造形世界を作り出している。

《燃える椅子》 2013 Courtesy of Taka Ishii Gallery



シュレヤス・カルレ

Shreyas KARLE

1981年ムンバイ（インド）生まれ／ムンバイ（インド）拠点

ヘマリ・ブフタとともにムンバイ郊外でCona Foundationを設立し、同世代のアーティストたちを牽引している。公共空間での芸術的实践に強い関心を持ち、彫刻、ドローイング、版画、写真、ビデオなど多岐にわたるメディアを駆使してアートプロジェクトを展開している。カルレは彼自身を場所から場所へ、そしてアイデアからアイデアへと渡り歩くノマド的存在と見なしている。異国の地での滞在制作では、街を歩き、観察し、日々出会い発見するものを彼独自の視点で収集しアーティストのための都市案内としての地図帳を作成した《アーティスト・イン・レジデンスのためのガイドブック》がある。近年では、ニューヨークの第3回ニューミュージアム・トリエンナーレ（2015）やコチ・ムジリス・ピエンナーレ2012（インド）などに参加している。

《Vaastushaghalay ki Dukan (Museum-shop of Fetish Objects)》展示風景
Asian Art Museum、サンフランシスコ 2015 Courtesy of Asian Art Museum



小林 耕平

KOBAYASHI Kohei

1974年東京都生まれ／埼玉県拠点

当初、事物の動きや動きの欠如、非人間的な行為の反復によって、鑑賞者の知覚・意識を吊り下げる映像作品を発表するが、やがて、小林自らが映像の「主役」と化し、オブジェや言葉の組み合わせや置換を「実演」。その後、対話者を変えた問答＝デモンストレーションへと展開し、近年はさらに鑑賞者を誘う彫刻＝インストラクションを発表している。媒体を拡張しながら、しかし、一貫して認められるのは、人間／モノ、意識／物質、主体／客体といった二分法への懐疑と、その徹底的な分析と操作である。一方、そのような厳密さが、作者自身のイメージとアイデアの奔出によって、大きく揺さぶられていく局面も見逃せない。小林作品の測り知れない魅力がそこにある。

《三本のしわ ニッポンの豚足 どこまでも転がるロースト》展示風景
「アーティスト・ファイル2015 隣の部屋—日本と韓国の作家たち」国立新美術館、東京
2015 photo: 大西正一+中川周 提供：国立新美術館／山本現代



ヴァルサン・クールマ・コッレリ

Valsan KOORMA KOLLERI

1953年パティアム（インド）生まれ／パティアム（インド）拠点

彫刻、絵画、インスタレーション、パブリックアートや建築、そして写真など多分野にわたり制作を行うアーティスト。クールマ・コッレリの作品は、自然と文化が出会うところに息づき、生物世界における新しいマクロコスモスおよびマイクロコスモスを生み出そうとしている。その仕事は、四大要素となる自然を用いて、あるかなきかの境界線にある現実を構築するという点で、歴史と考古学が重なり合うものである。もの（物質的な形としての）と超個人（歴史および同時代文化としての）の関係がさまざまな次元で合流するさまを示すことで、彼の視野は、作品によって限定された空間にさえ備わる地球規模の可能性へと開かれている。

《How Goes the Enemy》 2014 photo: 港 千尋



頼 志盛 (ライ・ツーシャン)

LAI Chih-Sheng

1971年台北(台湾)生まれ/台北(台湾)拠点

よく制御された技法と明確なアイデアが合体したところに成立するミニマリスト的な作品で知られており、今日の現代美術において、独特な表現を確立してきた。頼の作品が意図するのは、作品制作のプロセスを静謐で何気ない、精神的な気配へと戻すことにある。この、存在の状態を示唆するような気配は、日常生活の裂け目を浮き彫りにし、また私たちの現実には浸透あるいは充満しているものでもある。ミニマリストでありながら極めて明確に意味付けられ、表現されるアイデアを通じて、頼の時間と空間に関する芸術的解釈は、人々の世界の見方をつくがえし、現実を捉え直すための思いもよらない方法を私たちに教えようとする取組みであることが伺える。

《Border_Lyon》 第13回リヨンビエンナーレ、リヨン現代美術館 2015
Courtesy of LAI Chih-Sheng and ESLITE GALLERY



チャールズ・リム・イー・ヨン

Charles LIM YI YONG

1973年シンガポール生まれ/シンガポール拠点

オリンピックなどに出場するセーリングの選手として活動したリムは、水や海洋に関する深い知識や経験を背景に、「海」というレンズを介してシンガポールの社会や政治状況、生態系や環境に対して多角的に言及する《SEA STATE》という一連の作品を2005年より発表している。継続して制作する《SEA STATE》は、マニフェスタ7(トレンティーノ=アルト・アディジェ、イタリア2008)をはじめとする様々な国際展で発表され、2015年の第56回ヴェネツィア・ビエンナーレでは、シンガポール館においてその集大成が公開された。また、アーティストコレクティブ「tsunami.net」の一員としてドクメンタ11(カッセル、ドイツ2002)にも参加している。

《SEA STATE》 第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ、シンガポール館 2015
Courtesy of the artist



ラウラ・リマ

Laura LIMA

1971年ゴヴェルナドル・ヴァラダレス(ブラジル)生まれ/リオデジャネイロ(ブラジル)拠点

リオデジャネイロにおいて哲学と視覚芸術を学ぶ。90年代半ばから、リマは自ら「イメージ」と呼ぶ一連の作品を生み出してきた。それは、今日まで彼女が繰り返し取り組んでいるさまざまな個人的な概念を、視覚的かつ具体的にに見えるようにする試みだといえる。中でも象徴的な作品は、「Man-Flesh/Woman=flesh」という文言のもとにまとめられた作品群で、そこでは、人間と動物が単なる「もの(肉)」として扱われ、正確な指示書に従って行動するというものである。国内をはじめブエノスアイレス、メキシコシティ、チューリッヒなど各地で個展を開催している。

《Fuga (Flight)》 展示風景 A Gentil Carioca, リオデジャネイロ 2008
photo: Laura Lima/Ana Torres



松原 慈

MATSUBARA Megumi

1977年東京都生まれ/フェズ(モロッコ)、東京都拠点

建築を学んだ松原は、建築的な思考をベースとし、写真、音、テキスト、インスタレーション、光の現象など、さまざまな表現で編まれた空間についての物語を作り出す。その作品は、既存の環境に介入しそれを再構築することで、存在/不在の絶妙なバランスを模索するものだ。近年は、夢や意識として体験されるイメージを視覚世界に重ね合わせるかのような独特の空間感覚を、言葉とイメージを軸にしたアーティストブックの制作やパフォーマンスによって実践するなどの多様な活動を通してさらに深め、追求している。また、2002年に山田と設立した建築家ユニットassistantでは、《33年目の家》をはじめとする建築作品を発表している。

《A proposal for a textbook to learn Braille, English, and other languages》
Fonderia Artistica Battaglia, ミラノ 2012-2015 photo: © Oli Bonzanigo



三田村 光土里

MITAMURA Midori

1964年愛知県生まれ／東京都拠点

国内外でインスタレーションを中心とした発表を重ねてきた。日常の記憶と記録が作り出すドラマをテーマに、写真や映像、家具や小物、そして言葉が、物語の挿絵のようにして部屋に配置されていく。そこには、彼女自身の記憶や追憶が張り巡らされていて、彼女が紡ぎだすその物語を読みこんでいくよう鑑賞者は促される。多くの人が共感できるようなユーモア、そして悲しみがそこには存在する。近年は、ライフワークとして滞在型アートプロジェクト「Art & Breakfast」を世界各地で開催。

「Art & Breakfast Melbourne 2011」より朝食風景 2011 Courtesy of the artist



ジョアン・モデ

João MODÉ

1961年レゼンデ(ブラジル)生まれ／リオデジャネイロ(ブラジル)拠点

モデの仕事において核となるのはリズムである。その作品は、素材を集積すること、広く一般市民からの積極的な参加に、その多くを委ねている。鑑賞者たちは動きのある作品に立ち寄り、参加することで、ゆったりとした時間へと誘われる。さまざまな素材と色の紐を結びつけていく《NET project》もまた、アーティストの手から離れて、あらゆる参加者の手によって生き物のように育っていく。これまでにサンパウロ、ベルリン、シュトゥットガルト、レンヌなど世界各地の町に設置され、あいちトリエンナーレ2016でも実施予定。第28回サンパウロ・ビエンナーレ(2008)や第7回、第10回メルコスール・ビエンナーレ(ホルト・アレグレ、ブラジル、2009、2015)などに参加。

《NET project》 SESC Barra Mansa、リオデジャネイロ 2003- photo: João Modé



森北 伸

MORIKITA Shin

1969年愛知県生まれ／岐阜県拠点

どのような場所でも、展示する場所と空間を深く読み込んだ上で、シンプルな形で、丁寧に絵画と彫刻の作品を作ってきた。それらの作品を作り上げてきた形のモチーフは多くの場合、人、そして家である。これらは、手の痕跡を多く残しつつも、近代以降の絵画や彫刻のように図式的に表現されてきた。同時に平面や空間の中で、人と家の形は、造形面での均衡、時に意味論的な均衡の中で表現されていく。そして鳥の形が加わってきたのが近年のことである。その登場を人からの変形とも、人と家の間に存在するもの、とも捉えることもできるだろう。鳥の姿が登場したことで、彼の作品にはアルカイック、もしくは古典的な要素が与えられ、より始原的な世界が表象されるようになってきている。

《castaway》(平面) 2015

《horizon person》(立体) 2015 Courtesy of the artist



オスカー・ムリーリョ

Oscar MURILLO

1986年ラ・バイラ(コロンビア)生まれ／ロンドン(英国)拠点

幼い頃に両親とともにロンドンに移り、同地で絵画を学ぶ。グラフィティ的な作風で知られるが、関心の中心は制作と労働の関係であり、また、作品の完成ではなく時の推移である。スタジオでは染色や裁断、縫製が絶えず繰り返され、大型の絵画をうみだす一方、加工途中の布地も展示会場に山積みされて、芸術活動と労働の切り分けを曖昧にする。また作品表面の古色や経年変化は、制作を作者の意識・制御から放ち、受け手へと開く要素としてしばしば肯定される。彫刻や映像を加えたインスタレーションなど、活動範囲は広いが、常に強調される触覚性は、視覚芸術の拡張であると同様に、ムリーリョのなかでは、労働のリアリティに発することを見逃してはならない。

《signalling devices for now bastard territories》展示風景

第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ 2015 photo: Maris Mezulis
Courtesy of the artist and Devid Zwirner, New York / London



西尾 美也

NISHIO Yoshinari

1982年奈良県生まれ／奈良県拠点

2011年より2年間文化庁新進芸術家海外研修制度にて、ケニア共和国ナイロビに滞在し、創作活動に従事したのち、2013年に帰国し、現在は奈良県を拠点に活動中。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開している。代表的なプロジェクトに、世界のさまざまな都市で見ず知らずの通行人と衣服を交換する《Self Select》や、数十年前の家族写真を同じ場所、装い、メンバーで再現制作する《家族の制服》、世界各地の巨大な喪失物を古着のパッチワークで再建する《Overall》などがある。2009年には西尾工作室ナイロビ支部を、2013年にはアラカワ・アフリカ実行委員会を結成し、アフリカと日本をつなぐアートプロジェクトを企画・運営している。

《Overall: Steam Locomotive》 2010 Courtesy of the artist



大巻 伸嗣

OHMAKI Shinji

1971年岐阜県生まれ／東京都拠点

「Echoes」や「Liminal Air」などのシリーズで、美術館の展示室をはじめとして、街中においても、設置される空間のヴォリュームや色、光に時に大胆に時に繊細に変化を与えていくことで、そこでしか体験できない非日常的な広がりを持った場所へと生まれ変わらせる。それは同時に見るものの身体的な感覚を激しく呼び起こす仕掛けでもあり、舞台空間にいるような感覚、さらには時間の流れをも感じる場所となる。

《Echoes-Infinity》「MOMENT AND ETERNITY」Third Floor-Hermès Singapore 2012 Created with the support of the Fondation d'entreprise Hermès for Third-Floor Hermès Gallery-Singapore 2012.



岡部 昌生

OKABE Masao

1942年北海道生まれ／北海道拠点

日本の現代美術家。記憶や歴史の痕跡をテーマにした、フロッタージュ作品や土によるドローイングなど、大がかりなプロジェクトで国際的に知られる。1980年代後半より広島や福島の原爆の痕跡を作品化するプロジェクトを開始。現在も継続的に広島や福島といった都市に関わり続けている。コラボレーションやワークショップも積極的に実施している。主な展覧会に「ART for the SPIRIT 永遠へのまなざし」(北海道立近代美術館、2001)、「シンクロニシティ同時生起」(広島市現代美術館、2005)、第52回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館「わたしたちの過去に、未来はあるのか」(2007)、「タスマニアのヒロシマ」(MONAタスマニア、2011)、「南相馬の記憶と記録」(南相馬市、2013)、札幌国際芸術祭2014企画展示「都市と自然」(北海道立近代美術館)。

「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト2014」での展示風景 2014 photo: 港千尋



大木 裕之

OKI Hiroyuki

1964年東京都生まれ／高知県、東京都、その他各地拠点

映画監督／美術家。東京大学で建築を学んでいる頃から映像制作を始め、1989年に北海道松前町を中心にした映像作品群「松前君シリーズ」を開始し、現在もその制作を続けている。《HEAVEN-6-BOX》が第46回ベルリン国際映画祭(1996)NETPAC賞受賞。カメラを手に国内外を旅し、撮影を続ける。映像だけでなく日常生活のなかで集積する〈物質〉や制作過程で生まれるドローイングなどを交えたインスタレーション／ライブ／パフォーマンスを繰りひろげている。高知よさこい祭りでは16年連続でチーム〈M・I〉を主宰。膨大なイメージが次々に重ねられていく映像的表現からは、移動と生活と哲学の相関関係の全体が描き出される。

《松前君のまんじまんじゅのための映画》 2014 © Hiroyuki Oki, Courtesy of ARATANIURANO



マウロ・レスティフェ

Mauro RESTIFFE

1970年サンホセ・ド・リオバルド(ブラジル)生まれ/サンパウロ(ブラジル)拠点
レスティフェが好むのは曇りや雨模様の日撮影である。彼の写真は、厳密で幾何学的な構図とざらついた濃厚な質感に特徴づけられる灰色の陰影により、写真表現においては稀な触覚性を獲得している。彼の独特な画面構成の手法において、技法と主題の間には優先順位はない。すなわち、彼が生み出すイメージにおいては、フレーミング、光、遠近法そして内容はすべて等しく主役といえる。こうしたレスティフェの実践は、写真表現に内在している政治的な関係の骨格を明るみに出すのである。これまでに国内外で数多く発表しており、近年開館したモスクワのガラージ・ミュージアムでの大規模な個展を控えている。テート・モダン、サンフランシスコ近代美術館そしてサンパウロ近代美術館にも作品が収蔵されている。

〈São Paulo - Templo de Salomão〉 2014 photo: Mauro Restiffe



ルアンルパ

ruangrupa

2000年ジャカルタ(インドネシア)にて設立/ジャカルタ(インドネシア)拠点
アーティストたちが主導して設立した非営利団体。インドネシアにおける現代の都市問題に批判的観察眼を持って対峙し、社会学、政治、テクノロジー、メディアなどあらゆる分野の思考や実践を横断しながらアートの創造性を駆使して、都市やその文化的課題に応答する活動を展開している。拠点となるアートスペースを運営し、展覧会やワークショップ、リサーチ業務から、Ok video festivalなどの国際展の企画運営やアートラボ、各種リサーチプロジェクトの実践に加え、アートショップやコミュニティラジオ局RURUrudioなども展開するなど、その活動は多岐にわたる。また、書籍やアートマガジン、DVDやウェブマガジンの発行など、情報発信とアーカイブ活動にも従事している。第31回サンパウロ・ビエンナーレ(2014)では会期中都市を巻き込むかたちでアートスペースを展開し注目を集めた。

〈ruru〉 第31回サンパウロ・ビエンナーレ 2014 photo: ruangrupa



佐藤 克久

SATO Katsuhisa

1973年広島県生まれ/愛知県拠点

佐藤は極めてシンプルな手つきで、色と形の関係を平面の素材の中で探究してきた。図と地の関係、重ね合わせた色、並べられた色、色と色との境界、縞模様の装飾パターン、筆触の変化によって、作品の大きさも含めて、その最終形は多様なバリエーションとして現れてくる。切り抜いた形、切り抜かれてひねった平面も登場する。それぞれが実験室的に作られていったように見えても、その一つ一つの作品は色彩の力もあいまって生き生きとした表情が与えられている。それらがまとめられて展示されたときには、作家のアトリエに迷い込んだような、心地よさを感じさせるとともに、形と色彩の饗宴として現れてくる。

〈ちゃらんぼらん(01-03)〉 2013 Courtesy of Kodama Gallery



ハーバード大学感覚民族誌学ラボ

Sensory Ethnography Lab

2006年マサチューセッツ州(米国)にて設立/マサチューセッツ州(米国)拠点
美学と民族誌学とのコラボレーションを推し進めるハーバード大学の野心的なラボラトリー。アナログとデジタルメディアを組み合わせた研究プロジェクトの成果として、各地でのフィールドワークからそれぞれの土地とそこに暮らす人々の歴史や物語を豊かに織りこんだ映画、ビデオアート、音響、写真、インスタレーション作品を発表。日本国内では、2014年8月に北米の底引き網漁を圧倒的な映像美と音響で活写した『リヴァイアサン』が公開、2015年夏には傑作選と銘打ち、国内6都市で映像作品を上映する「ハント・ザ・ワールド」が開催された。人類学者であり、映画作家のルーシアン・キャストヌ=テイラーがディレクターを務める。

〈リヴァイアサン〉 2012 ©Arrête Ton Cinéma



白川 昌生

SHIRAKAWA Yoshio

1947年福岡県生まれ／群馬県拠点

1970年代にフランスおよびドイツで哲学と美術を学び、1983年に帰国。以来、群馬を拠点に、地方性、周縁性、マイナー性をあえて徹底的に引き受けながら、支配的な現代美術の動向や言説、中央の論理とは別の、地域の歴史・文化・経済と直結する活動、例えば「場所・群馬」を実践。今日の多文化主義的な、社会的参与を重視する芸術動向を先取る。また現代美術史に関する研究・著作も多く、優勢な歴史観や規範に対する批判・再検討を絶えず展開している。一方、個別の作品は、日常的な素材を多く用いつつも、かたちと色の構成配置において軽やかかつ精緻。彫刻の魅力や可能性を開き、問い続ける優れた実作者である。

《Tomoko & Light》2014 photo: 木暮伸也



クリス・ワトソン

Chris WATSON

1953年シェフィールド(英国)生まれ／ニューキャッスル・アポン・タイン(英国)拠点

これまでに数多くのレコードを発表してきた音楽家であり、同時に世界各地で、自然の中にある音、あるいは自然の歴史が示す音、そしてその場所の記憶を緻密に録音してきた。それはこれまで、放送用としてあるいは実験音楽のために使用されてきた。これまで彼が録りためてきた音は、まざまざと目の前にその空間を立ち上げてくれる。

ワニを録音するクリス・ワトソン Courtesy of the artist



山城 知佳子

YAMASHIRO Chikako

1976年沖縄県生まれ／沖縄県拠点

自らの出身地である沖縄を主題として、映像や写真、それらを組み合わせる手法により作品を制作している。2002年に最初の個展「墓庭の女」を前島アートセンター(沖縄)にて開催。山城の作品は、墓庭という沖縄独特の空間や米軍基地のフェンス、辺野古の海などを舞台に展開し、初期作品では山城本人が出演するものも多い。その作品は、沖縄の伝統や歴史、そして沖縄が今置かれている複雑な状況を比喩的に表現すると同時に、山城が自らの身体を通じて、沖縄という場所と向き合うプロセスでもある。フィクションと現実が交差する物語性、濃密さを伴う詩的な表現は、「沖縄」に留まらない多様な解釈を可能にする。

《創造の発端—アブタクション/子供—》2015
Courtesy of the artist / Yumiko Chiba Associates

【ガイドとガイダンス】

国際展では、ガイドツアーボランティアによる一般来場者へのガイド及び学校等団体へのガイダンスを実施します。

ガイドでは、個々の作品の鑑賞を通じてトリエンナーレのテーマと作品への理解を深め、また、複数の鑑賞者と体験を共有することによって、鑑賞者に新たなものの見方や発見を提供します。

ガイダンスでは、学校向け団体鑑賞プログラムへお申し込みいただいた学校団体に向けて、あいちトリエンナーレを楽しんでいただくために、あいちトリエンナーレの企画意図の説明や、見所などの紹介を行います。



あいちトリエンナーレ2013でのボランティアによるガイドの様子
宮本佳明(福島第一原発神社)



エクシネマ

EXcinema

2014年シアトル（米国）にて設立／シアトル（米国）拠点

シアトルでサライズ・ヒューズを中心に立ち上げられた映画作家集団。伝統的な映画手法の裂け目とダイレクト・アニメーションの手法の狭間で、デジタルメディアにおける実験映画を探究している。共同作品として、『都市と都市のあいだ』では、4大陸に渡る20名の国際的な実験映画作家たちに2～5分の作品を依頼し、北米、ヨーロッパ、南米、アジアを巡る、一本の長編映画を制作。シュルレアリスムにおける「優美な死骸」の手法を取り、作家たちは事前に与えられた映像の冒頭とエンディングの“きっかけ”を手がかりにひとつのストーリーを編む。ある作品のエンディングのイメージが、世界のどこかの作家の生み出す作品の始まりへのシグナルでもあるという、遊び心溢れた実験映画ロードムービーとなっている。

『都市と都市のあいだ』 2015 ©Pip Chodorov, Seoul



キドラット・タヒミック

Kidlat TAHIMIK

1942年バギオ（フィリピン）生まれ／バギオ（フィリピン）拠点

1963年フィリピン大学でスピーチとドラマを学び、1967年アメリカのペンシルバニア大学・大学院で経営学博士号を習得するが、1972年に卒業証書を破り捨てアーティストとして生まれ変わる。1977年にデビュー作『悪夢の香り』（1977）でベルリン国際映画祭批評家賞を受賞。1970年代より一貫して、自らが生まれたアジアの視点から、欧米の近代主義文明に疑問と批判的なまなざしを投げ掛ける、先駆的なインディペンデント映画作家として活動。またパフォーマンスやインスタレーション作品も手掛け、映画の領域に留まらないマルチ・アーティストとして、柔軟かつ旺盛な活動を展開。旅の半ばで命を落としたマゼランの世界周航を達成したのは、マラッカ出身の奴隷であるという説にインスパイアされた新作長編『バリクバヤン』は、長期に渡る撮影のため作家の実人生も刻印されていたユニークな作品。

『バリクバヤン#1』 2015 frame-grabbed from iPhone shot by Sang Bum Heo

追加情報



ピムパカー・トーウィラ

Pimpaka TOWIRA

バンコク（タイ）生まれ、バンコク（タイ）拠点

1988年から主に女性問題を扱った実験的な短編映画やドキュメンタリーを製作。代表作はタイの有名な幽霊話を解体してみた、『メー・ナーク』（1997）。長編デビュー作の『One Night Husband』（2003）はベルリンなど多くの国際映画祭で上映され、タイの女性映画監督として初めて世界で名を知られるようになるきっかけとなる。これまでの全作品で監督、脚本、製作を担う。2007年に製作会社 Extra Virgin を立ち上げ、若手のプロデュースにも力を入れている。長編2作目の『孤島の葬列』（2015）は、作家自身が旅した体験に基づき、タイ南部イスラム地域へ旅する姉弟とその友人のある離島へたどり着くドライブ旅行が、政治不安定な最中、個々人が内面に過去と記憶の矛盾を抱えつつも、個と他者の記憶の行き交いを通じて理想的な世界を探し求める人々の姿を浮かび上らせる。

『孤島の葬列』 2015 Courtesy of the artist

追加情報

追加情報



高嶺 剛

TAKAMINE Go

1948年沖縄県生まれ／京都府拠点

高校卒業まで那覇で過ごしたあと、国費留学生として京都教育大学特修美術科に入学。1974年日本復帰前後の沖縄の風景を凝視した8ミリフィルム作品『オキナワンドリームショー』でデビュー。以降、沖縄を舞台にした劇映画や8ミリ、ビデオ作品を発表し続けている。1985年初の劇映画『パラダイス・ビュー』完成。1989年『ウンタマギル』でベルリン国際映画祭カリガリ賞など、内外で多数の賞を受ける。1996年より、ジョナス・メカスの来沖をきっかけとして生まれた『私的撮夢幻琉球 J・M』を発表、制作中。1998年劇映画『夢幻琉球・つるヘンリー』も国内外の映画祭で上映。山形国際ドキュメンタリー映画祭、アンソロジー・フィルム・アーカイブ（ニューヨーク）で特集が組まれる。このほか、色鮮やかな絵画や短編を多数制作。現在、多面体オキナワ・ロードムービー『変魚路』を制作中。

『変魚路』（制作中）提供：変魚路製作委員会

参加アーティストたちによる展示に加え、この地域の活動の背景となる歴史的なものを掘り下げることで、参加するアーティストたちの活動を共通項でつなぐこと、先端的で実験的な表現を紹介することを目的としたプロジェクトを展開する。いくつかのキーワードに基づき、展示やレクチャーなどさまざまな形をとるこれらのプロジェクトは、全体のコンセプトを補間するとともに、アーティストの展示を背後で支え、時に相対化するものとして機能する。



『交わる水—邂逅する北海道／沖縄』

縦に伸びる地形を持つ日本の歴史にあって、北海道と沖縄は隣国と身近に接する場所であり、「先端」として時代の激しい変化を直接的に体験してきた。海を隔てたこの二つの地を、さまざまなアーティストが訪れ、異邦人のようにして集い、交流を重ねるとともに影響を受けあってきた。アートを通じて、それぞれの歴史、伝統、近代、環境そして現在を再考する。端聡（北海道）と町田恵美（沖縄）のキュレーションのもと、石田尚志、岡部昌生、山城知佳子、ミヤギフトシ等が参加。

辺名地ANNEXギャラリー屋上、沖縄本部町



『トランスディメンション—イメージの未来形』

デジタルカメラの急速な進化、ウェブサイトの普及と情報通信技術の進化、そして3Dプリンターの普及、さらにはコンピュータ・グラフィックスの高度化によって、これまで二次元の平面プリントを主体としていた写真の表現は質として大きく変化している。写真と現実の関係を根源的に問いかけることに始まり、二次元を三次元に展開する可能性も広がってきている。こうした写真表現の現在を赤石隆明、ルーカス・ブラロック（米国）、勝又公仁彦、小山泰介+名和晃平、横田大輔等の表現で探る。後藤繁雄が企画。

横田大輔 《Matter》 展示風景 「Trans-Tokyo / Trans-Photo」
集美×アール国際フォトフェスティバル、厦門、中国 2015
© Daisuke Yokota, Courtesy of G/P gallery, Tokyo

『マライーニ家の鏡—民族学者と20世紀日本』

イタリア人フォスコ・マライーニ（1912-2004）は、文化人類学者として日本の生活や文化を欧米に紹介したことで知られる。その彼が、家族とともに1943年から1945年の終戦までを愛知県の強制収容施設で過ごしたという事実を手がかりに、小企画展示を行う。

『異郷にて—西江雅之が歩いた世界』

西江雅之（1937-2015）は言語学者、文化人類学者として、アフリカ、ニューギニアや南米の世界を幅広く調査した。天才的な語学力でスワヒリ語の辞書を作るほか、幅広い経験と知識で、日本の多くの知識人に刺激を与え続けた彼の比類なき活動の一端を紹介する。

『アーティストの虹—色景』

今回出品するアーティストたちが選んだ色をもとにして、あいちトリエンナーレ2016独自のカラーチャートを作成するプロジェクト。

『鳥の歌—メッセンジャーの系譜学』

今回の複数の出品作品の中に登場する鳥のモチーフと、愛知県の歴史にも結びつく鳥のモチーフを展示して、鳥との深い関わりを示す。

『オキュパイアジア—アジアのコレクティブ』

欧米とは異なる形で成立した社会の文脈の中で、アジアのアーティストたちが試みるアートの活動、もしくはそうした活動を通して行う社会実験を紹介する。